

加賀藩政期における犀川大橋

石川県土木部 正会員 安達 實
白邦コンサルタント 石原 周次

A Study of SAIGAWA-OHASHI on Edo Period
by Makoto ADACHI
Shuji ISHIHARA

概 要

金沢市内中心部を流れる犀川に架かる犀川大橋は、金沢の幹線道路の関門であり、金沢市民に親しまれている名物の一つでもある。

大橋は、加賀藩祖・前田利家が文禄3年（1594）に架けたもので、昔は北陸街道の犀川に架かる唯一の橋として、今は国道の1日交通量3万台余を通す金沢市内の重要な橋として、その役割を果たしている。

明年・平成6年（1994）、架橋後400年目を迎える歴史的な名橋である。この大橋にまつわる加賀藩時代の出来事を、加賀藩の史料をもとに述べてみたい。（江戸時代・犀川大橋・橋梁史）

1. 文禄3年 最初の架橋

犀川大橋は、加賀藩祖・前田利家が文禄3年（1594）に架けたのが最初で、架橋のため、木材の切り出し等を許可している。当時の文書によれば

犀川橋手伝の事 能州へも又加州山おくへ越候て 材木を出し候事はゆるし候。則橋本ばかりにて手伝の事可申付候。不寄何時橋をかけ候て 手伝とどこおりなく 人足を可出候。此旨小大膳かたへも申遣候也。

文禄三年九月七日 利 家 印

尾山町年寄中¹⁾

当時の大橋は木造であるため、絶えず修理せねばならなかった。緊急の場合を除き、農作業を妨げないためと貢調の便に備えるため、秋の収穫の後に修理を行った。橋の修理や改築の費用負担や責任等については寛文の頃に定められている。

2. 橋詰に荷馬を繋がない

この頃の物資の運搬は、人が荷馬によるしかなかった。しかし、町中の商家の前には馬はおけず、また馬をとめる適当な木杭もなく、橋詰の親柱に繋ぐことがよくあった。このため時には人が通れず、馬があばれて通行人に迷惑をかけることが多いため、寛文元年（1661）、大橋詰に馬をとめないよう御算用場から十村へ、触れがだされた。²⁾

3. 寛文11年 大橋流失

寛文11年（1671）7月、大雨で大橋流失。この時橋には、侍主従と馬ほかに伊勢参宮の人がお

り、この人たち同じく流されたが、橋板にのりながら下流3キロばかりのところに無事漂着、人馬ともに無事だった。伊勢詣での人がいたため無事であったと、しばらくまちの話題となった。³⁾

4. 芭蕉が通った大橋

「月日は百代の過客にして、行きかう年もまた旅人なり・・・」ではじまる奥の細道は、俳人松尾芭蕉の紀行文である。3千里の旅150日余の内、曾良随行日記によれば元禄2年(1689)7月に10日間金沢に滞在した。犀川大橋すぐ近くの河原町の酒屋・三竹屋に泊まり、多くの門人たちと俳句を詠み、犀川のほとりを散策した。この大橋も幾度か通った。金沢で詠んだ「あかあかと 日はつれなくも 秋の風」の芭蕉の句碑は、大橋のたもとにあり、県内外からここを訪れる人は多い。⁴⁾

5. 舟 橋

元禄2年(1689)大橋が傷んできたので修繕にとりかかる。8月7日着手、9月5日完成。約1か月の通行止。その間下流に舟橋を設け通行に支障ないようにしている。この時の修繕担当は二百石の外作事奉行であった。4年後の元禄6年(1693)にも同じく修繕を行っており、この時も下流に舟橋を設け、往来容易にしている。

当時橋が流されたり、また工事の仮橋として舟橋を架けることが多く、大橋下流に舟を浮かべ、鎖を連ねて大綱やカスガイで結び、水の増減に応じて伸縮を自由にした。雇舟は14～15隻であった。⁵⁾

6. 巡見上使の来藩で大橋修理

宝暦11年(1761)巡見上使(将軍の使者として諸国を巡り、政治・民情を視察)が加賀藩へ来ることで大橋の修理を行っている。その記録をみると

3月24日、今般巡見上使御通行に付香林坊橋出来、今日より往来有え。犀川大橋下地其儘、松板を以おがめの儘上ぶきに相成候。



図-1 延宝金沢図(石川県立図書館蔵) 犀川大橋 長さ40間 幅3間

とある。巡見上使の来藩で、その用意や対応がたいへんであった。宿舎の準備、旅宿門前の取締はもとより、上使滞在中の諸上の心得が論されている。⁶⁾

7. 明和の大普譜

明和元年（1764）大橋の傷みがひどくなってきたので、町中へ架け替えることの入札の旨の触れ書を出した。仮舟橋と本橋合わせて工事費120貫目必要であるのに、「75貫目落札に而被申渡候」とある。入札方法は近代的であるのに、予定価格の6割で受注するのは、今もどこかの国でもありそうである。

工事は9月29日に川下に14隻の舟橋をかけることから始まり、11月27日普譜完成。57日を要した。前回の架け替えは元文3年（1738）で26年目である。⁷⁾

8. 天明の大洪水

天明3年（1783）7月、大雨にみまわれ、手取川をはじめ藩内の全ての河川はらん。犀川沿いの家屋の流失が多かった。犀川唯一の大橋も流失。すぐに仮舟橋が出来ず、兩岸に大綱を張り、繰り舟で往来したが、盆の頃に渡船場の混雑ひどく、藩祖前田家への廟参は本年に限り舟橋出来るまで延期と諸士に告げている。⁸⁾

この年7月の大雨洪水の時、流れてきた物の処分は、11月になって盗賊改方より御達しがでた。洪水の川中で拾ったもの、水が引いた後拾ったものなどの状況に応じて取り分が決められた。⁹⁾

9. 架け替え工事に従事する奉行の服務態度

工事現場の責任者の服務態度が良くなければならないのは昔も今も変わらない。寛政元年（1789—フランス革命の頃）11月、大橋の架け替え中であつたが、この年天候不順で寒い日が続き、俄か雪が降ったので、外作事奉行手拭いを被りながら現場にいたことで注意をうけた。この頃家臣や武士の行状を正すことが厳しい折りゆえ「寒くても武士の体面を忘れるな」と注意をうけた。今ならばヘルメット着用せずに、工事現場に立ち入りできないと同じである。¹⁰⁾

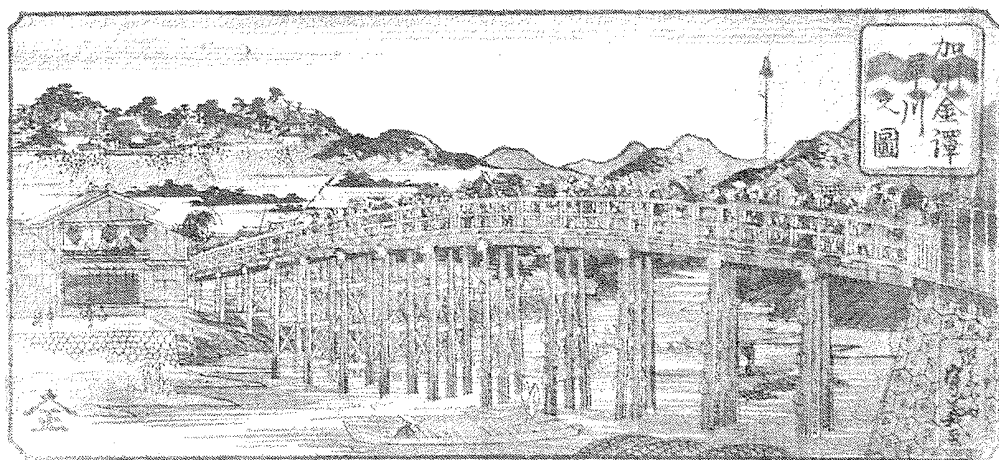


図-2 加州金沢犀川之図（金沢市相良家蔵）
幕末の犀川大橋の繁昌ぶりを描いた錦絵 背景は金沢城

10. 文化の大洪水

文化4年(1807)9月、大橋の工事で舟橋にて往来していたところ、大雨で舟橋も流され往来途絶。舟の調達はすぐには出来ず、舟1隻の綱渡しで往来することになったが、大城下の人々の往来多かったことゆえ、渡船場は大混雑。警固足軽がでて、私用人は通行させず、公用人のみ往来させたとある。約10日間で舟橋復旧し往来自由となった。¹¹⁾

11. 失業救済事業としての架け替え

幕末の天保期は凶作が続き、生活困窮者が多かった。天保8年(1837)藩主は、大工等職人で困っているもの救済のため、傷みかけはじめ、遠からず架け替えになる大橋の工事にとりかかり、これに従事させ職を得さしめた。昔も今も不況対策として、公共事業を興すのは同じである。¹²⁾

12. おわりに

このように修理や架け替えを繰り返しながら、明治を迎えるのである。維新以後、第1回の架け替えは明治4年(1871)である。

藩政期の大橋は、木造けた橋で特色はないが、城下町金沢にある犀川の唯一の橋であり、藩の重要な財産でもあったと思う。今は鋼トラスの永久橋、上流には治水のダムも出来、大雨の心配はなくなったが、未永く県都金沢を見守っていてほしいと思っています。

参考文献

- | | |
|------------------------|-------------------------|
| 1) 加賀藩史料 国初遺文 (文祿3年分) | 7) 加賀藩史料 泰雲公御年譜 (明和元年分) |
| 2) " 改作所旧記 (寛文元年分) | 8) " 政隣記 (天明3年分) |
| 3) " 老翁雜記 (寛文11年分) | 9) " " (") |
| 4) 曾良隨行日記 | 10) " 御横目方密役記 (寛政元年分) |
| 5) 加賀藩史料 参事公年表 (元禄2年分) | 11) " 統漸得雜記 (文化4年分) |
| 6) " 泰雲公御年譜 (宝暦11年分) | 12) " 毎日帳書抜 (天保8年分) |

図は金沢図屏風(昭和52年 文一総合出版)

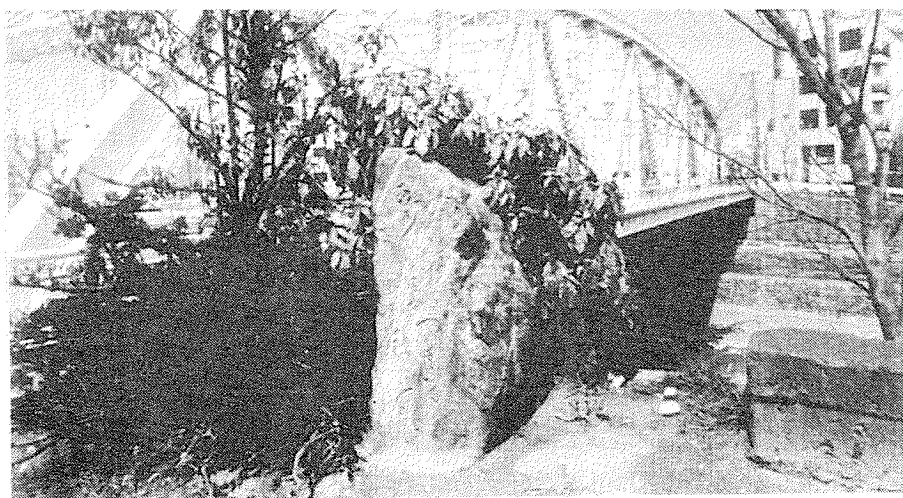


写真-1 現在の大橋のたもとにある芭蕉の句碑